

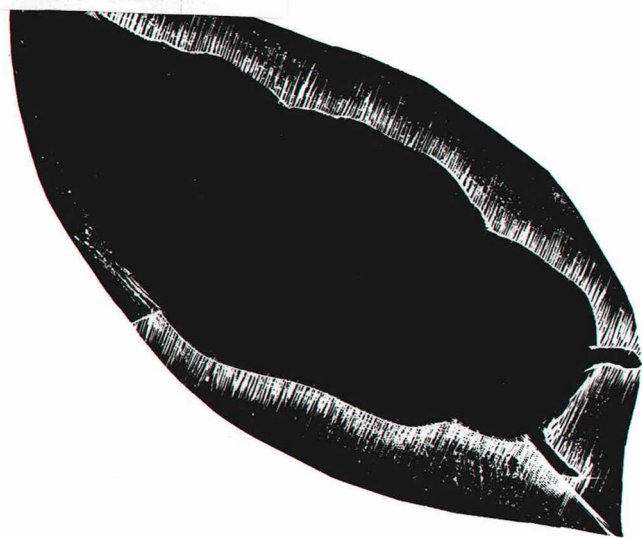
前登志夫

吉野日記



前登志夫

吉野日記





吉野日記

前登志夫

昭和五十八年十一月三十日 初版発行

発行者 角川春樹

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三
△電〇三(二六五)七一一大代表
△振〇東京三一九五二〇八△郵〇一〇二

東洋印刷・宮田製本

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0095-883147-0946(0)

吉野日記／目次

霰たばしる……………	七
新春山家……………	一九
雪の上の月のひかり……………	三〇
斑雪の日々……………	四二
山ひそまりぬ……………	五三
鬱の春……………	六四
若葉の風……………	七三
山道に迷う……………	八三

九字のまじない	二四
仁王像とワルツを踊る	二七
初秋の澄んだ海に	三〇
無用を生きる	三三
敗れた神々	三四
冬至の餅	三五
森の時間	三六
立春の山をくだる	三八
さくら咲く日に	三九
大峯山上ヶ嶽戸開け式	四〇
時鳥の啼く山	四二
夏至の国原	四五

くらがりに鳴く蟬……………三三

静かな交尾……………二四

熊野の鴉……………二六

春のことぶれ……………二九

あとがき……………二七

装釘
司
修

吉野日記

霰たばしる

奥山に雪が降ったときいてから、もうだいぶ日がたつ。

そのころ裏山へ登ってみた。まさか雪嶺になっていると思つたわけではないが、新雪に浄められた大峯の連嶺を眺めなければ家にいても落着かない。山々は、いつものように藍と紫をまじえた、かすかな濃淡をくりひろげているのであつたが、なんとなく錫色すずいろを帯びてそそり立っているように見えた。

あたりの針葉樹林の空からきこえる風のひびきは、まだ秋の名残りのようにやさしい。空が鳴るのか、梢がうたうのか。杉・檜ひのき・榎えのき・松など、冬も憩うことのできない濃緑の梢はひどく孤独だ。垂直に立ち並ぶ樹木の形づくる、木の間の空間*はひっそりしている。枯葉が濡れている。羊齒しだの葉も濡れている。時雨がいま過ぎたばかりだ。ふと見ると、熊笹のしげみに白くこぼれているものがある。霰あられだった。かすかな戦慄が身ぬちを走った。見てはならぬものを見てしまった時のように――

あれからもう一ヶ月ほどになる。霜月の小春日にめぐまれ、季節は、冬から秋へ逆戻りするような初冬だった。新嘗にいなの祭りの餅を一臼搗くのに、わたしは汗をかけた。祭日には、下の女の子だけが八幡神社に詣でた。いつもは沢山落ちてくる社前の矢倉の下ぶくの石段で御供を拾おうとしたが、そこへはお餅を少しも撒まいてくれなかったとこぼしていた。

裏山にもう霰あられが降っていたのだということを、家族にも言うことなく過ぎていたが、ときどきばらばらと飛び散る霰のさやぎを思ったりした。霰のちらばっていた裏山の森のあたりは、この冬のあらたな結界のように思えた。

わが袖に霰あられたばしる巻きかくし消たずてあらむ妹いもが見むため

『人麻呂歌集』のこの歌を思うと、息づまるようにはげしく降る霰のリズムがきこえてくる。じつさい年の暮れになると、山では霰が地面に厚くつもることがある。妹に見せるために、霰を袖に包み込んでこぶのである。消えてしまわないでくれという。なんというはかない伝達であろう。詩歌のことばにこめられた感動というものは、さらにはかない。

霰は突然に不意をついて降ってくる。冬を予知する季節のはしりでありながら、時じくというにふさわしい天然である。人麻呂の時代に、霰をすでに季節のみやびとする美意識があったのだろう

か。この歌に込められた作者の心おどりを思うと、霰は珍しい季節の現象であったことが分る。不意に襲ってきて日常の時間を断ちきり、ものみなに生氣をもたらず霰の情熱的な性格がうかがえる。当麻寺に役行者たまたでら えんのぎやうじや（小角）の木像を拝観した後、寺を出たとき霰の急襲に逢った、秋艸道人は次のように詠んだ。

おにひとつぎやうじやのひさをぬけいでてあられうつらむふたがみのさと

鬼というのは、役小角の両脇にいつも控えている、前鬼ぜんき・後鬼ごきである。秋の日の霰の不意打ちは、かの妖しい面構えの鬼のしわざにちがいないと思つたらしい。霰にはそんな魔性のしわざが感ぜられるところがある。

もつとも、和泉式部の場合は、はげしい霰のリズムが性愛をかきたてるものとなる。

たのめたる男をいまやくと待けるに、前なる

竹の葉にあられのふりかかるをききて

竹の葉に霰ふる夜はさらさらに独ひとりは寝ねべき心ちこそせね

竹の葉に降るさらさらという霰の音を、かさねがさねという強めの副詞「さらさら」に掛けているが、霰の降るさやぎは人を待つ女性の焦躁を煽るものであった。「あられ打つあられ松原住吉の弟日娘と見れど飽かぬかも」という、長皇子の一首もまた霰の打つさやぎが語感によくあらわれている。弟日娘は航海を占う住吉明神の巫女であつたのか。文字通り白砂青松の渚に降る霰の風景は、カミのもたらす情熱であつたにちがいない。

ところで、『人麻呂歌集』の歌がすべて人麻呂の作歌であつたとは考えられないが、巻向の風土とその妻を詠んだものには、独特の抒情が見られる。ふと、死者への言問いのような印象すらあるのはどうしてなのだろう。妻に霰を見せようとうたった一連には、「巻向の檜原もいまだ雲居ねば子松がうれゆ沫雪流る」があり、人麻呂の巻向歌である。泊瀬の斎槻の下に隠した妻を思う旋頭歌にも、挽歌のような雰囲気がある。古代女性の忌み籠りの習俗伝承を重ねさせているから、あの世の匂いが漂うのであろうか。妻に霰を見せようとする童心は、万葉びとのみやびであるが、霰はひよっとすると山の民にとって大切な季節の民俗であつたのかもしれない。たとえば、霜月祭や冬至祭などの――。

あの一首を思うと、どうしてか宮沢賢治の「無声慟哭」の有名な詩篇を思い出す。そこでは霰が雲にかわる。

永訣の朝

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

(あめゆじゆとてちてけんじや)

うすあかくいつそう陰惨いんざんな雲から

みぞれはびちよびちよふつてくる

(あめゆじゆとてちてけんじや)

青い蓴菜じゆんさいのもやうのついた

これらふたつのかけた陶枕たうまくらに

おまへがたべるあめゆきをとらうとして

わたくしはまがつたてつばうだまのやうに

このくらいみぞれのなかに飛びだした

(あめゆじゆとてちてけんじや)

蒼鉛いろの暗い雲から

みぞれはびちよびちよ沈んでくる

ああとし子

死ぬといふまごろになつて

わたくしをいつしやうあかるくするために

こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

……………(略)

人は命終にいたって、一茎の草花や一枚の紅葉をみたいという。身熱にあえぐ賢治の妹は、あめゆきを欲しいという。私を生涯明るくするために死を前にした妹はそれを私にたのんだのであると、賢治はうたう。人がその末期に見るものは、おのれの生の單純な形であり、それはまさしく幻というほかない現実だろう。一茎の草花に如かないおのれの生の総体であり、一椀の雪よりも茫々たる無であるように思える。そこではわれわれが疑わなかった生の意味が曖昧になり、人生の絶対性を支える輪郭が崩壊するにちがいない。雪や霰や枯葉や木枯しは、こぞって問うだろう——人間とは何かと。

*

夕暮れ、子供を迎えにぶらぶらと坂を下りた。霰が急勾配の杉山の道をほの白くしている。寺院が途中にあるだけの昔の道を歩くのはひさしぶりだった。子供達は朝夕この道を歩いて学校に通っている。崖崩れがあり、岩肌が露出したまま急な階段道になっている処をキツミという。そこまで下りると、下の集落が見える。河に沿って平坦な道路があり、家々がいくらか並んでいる。キツミの急坂に立って、眼下の一筋の道を歩いて帰ってくる下の子、いつみ待つ。自分で名づけながら、いつみとは少し変った名前だと思う。「みかのはら湧きて流るるいつみ川いつみきとてか恋しかるらむ」という、百人一首の一枚だけは、この子は小さい時から兄に取られることがなかった。

わたしは、泉というイメージと、斎・巖の語感とを重ね合せて、あえて濁らないままに名づけてしまったのであるが、キツミに立っていると、いつみがすこし苦しい感じになる。

頬をいっそう赤くして登ってきた童女は、画用紙にもぐらを乗せて捧げるようにしている。早く捨てると言ったが、大事そうにもぐらの背を撫でているのを見ると、ネズミタケのような淡いピンクの足を持つもぐらも案外に愛嬌のあるものだとはじめて知った。かわいそうだというので、道から少し入った木蔭に置いた。谷をへだてた杉山の上に、乳色の雲が浮んでいる。「あれ、もぐらに似ている」と言う。そういえばなんとなく似ている。夕闇が山褰に滲むようにひろがるにつれて、

もぐらの雲はしだいに赤みを増してくる。雪の近いのが感じられる。

「パパ、ようねむれた？」と、ませたことを童女は言う。幼稚園のころは、大雪の日によく坂まで出迎えた。心配していると、雪だるまにするのだと言って、大きな雪の球を擁^{だきかか}えて登ってきた。赤いゴム長がほとんど雪に埋まりながら、赤い頭巾の童女は、その日習ったデンデン虫を唱い、その唱歌に合わせて両方の指先を交互に交える遊戯を歩きながら始めたものだ。赤い毛糸の手袋の小さな指が、雪道の上に踊るのを見ていると、山住みの悲哀がほろ苦く湧いたものだ。

「昨日、猪と長い間やつとったけど、とうとう獺師こなんらしい」と、村びとが言う。獺犬は猪を追いつめ、獺師が来るまで格闘をする。むろん猪に正面から当っては一たまりもなく潰^{つぶ}された。り裂かれたりするので、茂みに退いたり、突進してくる猪の上を飛び越えたりする。——どのあたりですかと問う。またしても、山びと特有の地理案内が始まる。

——あの残し木の所にちょっと行ったら、

——小登り（緩やかな坂）になって、

——伐り跡の方へ肘折^{ひじかじ}って（折れること）、

——おっぱん木（笠の形の木）の所から、水の湧いている所を、植込み（植林したばかりの山）の方へ下りて——。

わたしは今までこの類いの山案内にどれほどなやまされたことか。これはまったく地理の説明で